

会員だより

石清水八幡宮に詣でて

平安時代の初め、貞観元(859)年、南都大安寺の僧、行教が豊前の国(大分県) 宇佐宮に籠り日夜熱禱を捧げ、八幡大神の「吾れ都近き岩清水男山の峰に移座して国家を鎮護せん」とのご託宣を蒙り、同年、男山の峰に御心霊を奉安したのが、岩清水八幡宮の起源とされている。朝廷の崇敬も篤く度々行幸、御幸が行

われている。男山は木津、宇治、桂の三川の合流点を挟んで、天王山と対峙する位置にあり、京、難波間の交通の要地でもある。この交通、政治上の要の地に鎮座し、わが国の平和と繁栄を導く神として多くの人々に崇められ、現在では八幡大神を祀る神社は、全国津々浦々に約四万社にもなる。清和天皇の嫡流である源氏一門は八幡大神を氏神とし、全国各地に八幡大神を勧請した。また八

幡宮は厄除けの神としての信仰の歴史は古く、全国屈指の厄除けの神社として年間を通じ参拝に訪れる人が多い。この春一番の暖かい日に八幡宮を訪れた。京阪

電車の八幡市駅からケールに乗り(約5分)、神社へ向かう。ケールの駅からならだら坂の上りで、一の鳥居、三女神社を過ぎ本殿にいたる。ご祭神は、応神天皇、比咩(ひめ)大神、神宮皇后である。社殿は「八幡造り」といわれ、六宇の宝殿が作られている。本殿は檜皮葺で前後二棟からなり、その軒の接するところに織田信長寄進の「黄金の樋」が架けられているそうだがよくわからなかった。本殿の後ろに回ると、



「相撲ラブ」 春場所を観戦



3日目、毎朝稽古に励み、また山水館で盛り上がり乾杯した若手の取り組みを見たくて、一人で「なんば体育館」へ、12時着。各部屋の幟がはためき、着物姿の力士たちや、ひいき力士の到着を待ち構える人々と、大阪特有活気あふれる雰囲気、心うきうき！向正面(むこうしょうめん)椅子席最前列真ん中のチケットゲット。まだ棧敷席の前列以外は空き席が目立つ。ちょうど藤島部屋で毎朝稽古を見学、お気に入り応援している若手武玄大(むげんだい)が登場、みごと白星。ご機嫌で観戦中に、何人か離れた席付近がざわざわ！何でしょう？場内警備役の、まだ断髪をしていない親方(実は藤島部屋の顔なじみになっている元垣添や元武雄山)が駆けつけてきた。どうやら飲み過ぎ酔っ払いじいさんが最前席椅子から転げ落ちたらしい。そして私の目の前を今場所引退した相撲界のロボコックの愛称で場所を沸かせ、連日TVのインタビューで顔を見せている高盛りと藤島部屋先場所引退力士武州山の二人が、鬚姿の警備員ジャンパー姿で担架を持って私の前を走り去った。そして担架に酔っ払いを乗せ軽々と私の目の前を通り過ぎるではないか。シャッターチャンス！パチリ撮ったあ。プロのカメラマン誰もいない場所での突然の出来事だった。

この日は、場所は大荒れで、4大関が黒星、おまけに先場所全勝優勝した横綱の日馬富士が3日目にして、負けるという番狂わせの座布団が舞うという大騒ぎの6時間の観戦となった。

私は、横綱の土俵入りを始め、目の前を土俵に出入りする、お相撲さんを目の当たりに楽しい時間を過ごしたが、おそらく誰も撮っていない、この写真に満足した春場所でありました。 Y. I

リメイク【和から洋へ】

古布や古着から自分の好きな色柄より、ブラウス、ベスト、コートなどを縫い始めて早くも7年！全くの初心者で手仕事の苦手な私が和布の美しさに魅了されています。作業場(足の踏み場もない)に入ると食事作りも忘れて夢中になり家族に迷惑をかけています。 H・N



[ピンタック入りのブラウス] → 大正ロマンの優しい黄緑にハイカラな柄がとても気に入り、残りの布でマフラーを作りました。



← [ヘチマ衿 ベスト]

シルク ウールの着物より 82歳の義姉の古着より作りました。衿は大島の着物の八掛による、シルクならではの渋い赤で襟元のはなやかさを出しました

若宮社、若宮殿社がある。どちらも応神天皇のお子様で若宮社は男性を守護する神様、若宮殿社は女性を守護する神様だとか。参道の両側には古く苔むした石灯籠が並んでいた。平日で、祭日でもなく、ほかに人影はなく静かな境内でゆっくりと神様と向き合ったような一刻だった。 F・M

茶子の折り紙

茶目っ気たっぷりで人を和ませしてくれる道化師いまどきはクラウンともいうのか？サーカスでは客席の中に入って風船を、お客さんに渡している情景が目

